

先日の朝日新聞の「ひととき」欄より

自由すぎる時間

夫が逝って9カ月。ひとりの生活がこれほどむなしいとは想像できなかった。

昭和ひと桁生まれの夫は私のことを道具扱いして思いやりがなく、言葉の暴力に苦しめられた。「ひとりになったらどんなに楽だろう」「年を取っても面倒などみるものか」と思っていた。

しかし、夫は50歳の時に脳梗塞になり、年々頭も足も衰えて私の世話になることが増えた。最後は車いすの生活だった。「おかあさん、ありがとう」「すまないね」と、感謝やねぎらいの言葉を口にするようになり、それとともに介護も苦痛ではなくなっていた。介護の合間の買い物にわくわくし、夫の好物のスイカやバナナ、和菓子を買いたい。求め、一口ごとに「ああ、おいしい」という声を聞くのが最上の喜びだった。長生きして欲しいと思った。

いまは1日24時間全部自分のもの。私は健康で生活も自分でできる。なのに、夫の透析の間に通っていたジムさえなまけている。生前と同じように遺影に向かって話しかけるときだけ、少し心が和らぐ。

災害で不自由な生活を強いられている方々もいるのに、なんとわがままなことか。早く立ち直り少しでもひとさまの役に立ちたい。

(埼玉県川口市 古島キミエ 主婦 75歳)

・『正法眼藏』「見仏」巻にて提唱された道元禪師は、法師に親近しんこんすることとは、中国禪宗二の慧可大師が達磨大師に8年お仕えした事実であるとし、そして「全臂得髓」と示されています。

・京都生まれの孤雲懷奘禪師は、道元禪師よりも二歳年上でした。比叡山で出家得度された後、浄土宗に学ばれましたが、納得がいわずに大和の多武峰(とうのみね)奈良県)を拠点としていた禪宗の一派、日本達磨宗で修行を積まれました。その後、中国から帰国された道元禪師と建仁寺で出会った、その教えのすばらしさと人格の清廉さに惹かれ、五年後の1234年、懷奘禪師37才の時に正式に弟子入りされました。以後、全ての私心を捨てて、54才にて遷化される道元禪師に隨身され、孝順の誠を捧げました。